

水中に眠る“過去”との遭遇

— 紀淡海峡海底探査 —

1983年

中嶋 哲

探し始めて3日目、午後2時30分、右手前方にぼんやりと、黒い影が直立しているかのように見える。「海藻かな？それとも気のせいかな？」と思いながら、再び北北西に進み始める。「気になる。やはり不自然だ。」すぐ引き返し近づいてみる。大きな×印が視界に入った。付着生物の塊のようなそれには、中心から5本目の足が生えていた。さらに凝視する…… 「…イカリやノ」

— 3月22日 加太瀬戸 —

“wreck-ship”(沈没船)，“submarine-re-mains”，(海底遺跡)，“under water-archaeology”(水中考古学)、これらの言葉は、近年世界的な注目を集めている。

人類は、陸に関しても海に関しても、表面についてはそのほとんどを社会圏とし、あらゆる方面に渡って熟知している。しかし、こと地底・水底といった日常目に入らない所に関しては、どれ程知っているのであろうか。確かに海底については、近年の海洋開発は目覚しく、数々の分野についての調査が始まり、調査可能な範囲も広がってきた。技術的には海洋の征服も、もはや時間の問題であろう。しかしこのとき、海底は広範囲を均一とした視点で捉えられ、地形地質学・海洋学といった形の認識に留まるであろう。

一方今日、レジャーとして一般大衆にまで広まった技術に、自給気式潜水器による、人間を直接水中に送り込むシステム(Scuba Diving)がある。これは極限られた範囲でのみ有効なものであるが、この最も身近な海底についても、我々はどれ程地域的に捉え、領域とすることができたのだろうか。

これは水中考古学の現状が如実に表現している。相変わらず、漁夫や潜水夫によって偶然発見され、「こんな所に…」と、世間を騒がして初めて海底調査が行われている。この実状は、その直前まで、砂礫と遺跡、転石と沈船の区別すらなかったことを暴露している。元来、水の層は長い歴史の中で、常に人間社会圏の外壁の一部を受け持ってきた。そして人の介入を拒否するかたわら、数々の生活や文化を、半透膜の如く一方的に吸い込んできたのである。ところが今、膜は逆流を許し始め、見失われていた過去は、再び社会に還元されつつある。ここに始動した水中考古学は、水層の高い保存能力により、数々の新事実を世間に示した。そして、今それを調査研究することは、社会的欲求となりつつある。

にも拘らず、海底は前述のとおり認識が粗雑であるばかりか、少なくとも日本沿岸に於いては、系統だった分布予想さえなされていないのが実状である。

ここ紀淡海峡は、淡路島東南端生石鼻と、和歌山県加太西端田倉崎に挟まれ、中央東寄りに大小四島からなる友ヶ島が横たわっている。この海域は古代からの海上交通の難所で、中世以後も中国との貿易路や、東国への国内航路となり、数多くの難破船が沈んだと考えられている。実際、古くから手操網漁の行われてきた友ヶ島北方に於いては、中国陶磁器類やナウマンゾウの化石等が数多く引き上げられている。これに対し、友ヶ島南方は一本釣り漁場で、過去、底引き網漁は行われていないとされている。もちろん遺物発見例も皆無である。そこで、我々はこの友ヶ島南方に於いてまず、虎島南方及び深山湾沖の数ヶ所を選出し、海底調査の実施を計った。

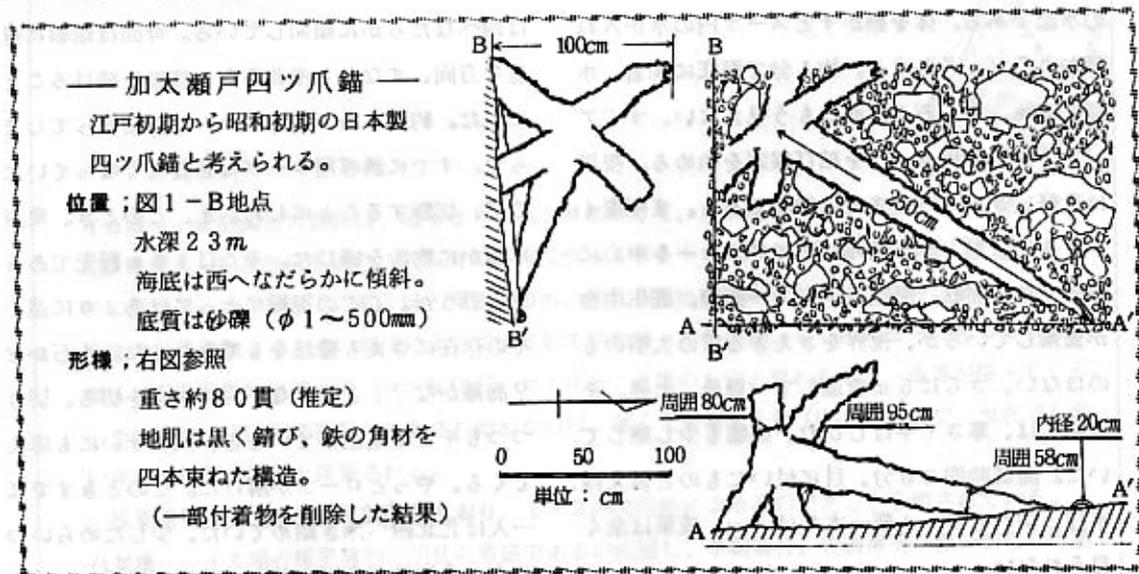
1983年3月20日、いよいよ探査活動が始まる。潮止まりを狙って11時30分、加太漁港を出航する。深山湾沖(P₁地点)へと向う。20分足らずで到着。ブイを浮べる。まだ少し潮が流れているのがよくわかる。12時15分、一人を船上に残して潜降を開始した。水温12℃、真冬の水温である。体を動かすとスーツ内の水が入れ替わり、「ゾッ」とする。約1分で海底に到着。水深28m、もちろん水面はもう見えない。すぐアンカーに誘導用ロープを結び探索を始める。視界は良好、3mぐらいまでは鮮明である。まず東(90°)に直進。5m進んだ所でアンカーを中心に右回りに一回転。海底は平坦で一面礫。底生生物が繁殖しているが、視界をさえぎる程の大型のものはない。さらに5m東進して一周後、上昇。その頃には、寒さで手はしびれ、頭痛も少し感じていた。滞底時間20分、目に付いたものと言えば、木片三切れとビール瓶一本だけ……。成果は全く見られない。

21日正午、虎島南方(P₂地点)へと向う。途中、雨が降り出す。13時05分、昨日同様、一人を残しブイより潜降。水深24m、底質が軟泥のため、視界は幾分悪い。探索も昨日と同様の手順で進める。一面泥で海底近くで身動きすると、泥煙が立ち込める。途中、木片一切と、ヒラメを見た以外、何もない真平な世界である。

22日13時30分出航。昨夕、漁師と雑談を交す中「加太の瀬戸東側に、空瓶がたまっている所がある。潮流と地形の関係から、海中の物が運ばれて来るようだ」という興味深い話があった。友ヶ島北方のイカ場遺跡(図1参照)の状況を思い起し、本日の探査ポイントを予定より少し北(P₃地点)に移すことにした。今日は、読売テレビの方々が協力に来られているので、何としてもこのポイントで、何らかの手掛りを見つけ出したいものだ。ここは、当海域の中でも特に潮流の速い所で、到着した時にも、水面が流れているのが一目でわかった。上昇するときに潮流のないように、転流時の約30分前(14時19分)に潜降を始める。誘導用ロープをアンカーに結び、北(0°)へ向かって探索しながら直進。水深20m、海底は西へなだらかに傾斜している。今回は傾斜に垂直な方向、すなわち南北方向に移動を続けることにした。約30mで誘導用ロープが絡まってしまった。すでに誘導用ロープは必要なくなっていたので、切断することにした。と、このとき、東方に幽かに物影を感じた。そこは10m程先であったと思うが、この視程にとってはあまりに遠く、その存在にさえも確証をもてなかった。「石かな?海藻かな?」と考えながらロープを切る。切りつつもそこを見詰めていると、気のせいにも思えてくる。やっとロープが解けた。このときすでに一人は北北西へ泳ぎ始めていた。少しためらいつつも、手信号で合図を送り、改めて確認しに行く。

「あった、やはりあった。」石でも藻でもない。どうやらイカリのようである。爪が四本あり、胴の長さは我々の身長よりも長い。付着物が多くてそれ以上はよくわからないが、最近ではあまり見かけない型のように思われる。私は、ただ茫然と見つめていた。1～2分、空白の時間が流れる。ふと自分の呼吸音が耳につき、次の思考を喚起した。「撮影だ！」そして、アンカーをイカリの前に落として、カメラを取りに上昇を開始した。船上がり、次の潜水計画を立てる。今、ちょうど転流時にあたるので、早く潜らないと流れが強くなる。前回の潜水が、最大水深25m、滞在時間20分。次の潜水の水深が23m。アメリカ海軍減圧表によると、10～45分の水面休止をとると、12分間、無減圧潜水が可能である。以後の減圧表をチェックして30分後の潜降を決定した。今回の潜水目的である撮影には、これまでのスチール写真と共に、読売テレビから貸用したテレビカメラを用いる事になった。15時15分、潜降開始。すでに転流時を過ぎているため、ブイとアンカーを結ぶロープは斜めに張り詰め、潜降も流れに逆らって斜めに潜って行く。しかし、まだ十分流れ

に逆らって泳ぐことが出来る。急いで海底まで降下し、まずアンカーロープをイカリに巻きつける。明日以降の再調査に備えて、ブイを固定するためである。そして撮影。その間わずか10分であったが、みるみる流れは増して行き、水中でもそれ（砂等の浮遊物の流れ）が見える程になっていた。撮影を続けるにも、じっとして居られない。残りの調査は明日以降にまわして、上昇を開始する。水面到着。二人してブイのすぐ下のロープを持っている姿は、まるで鯉轍りのようである。後10分もすれば、流れに逆らって泳げなくなっていただろう。「少し強引過ぎたかな……」と思いながら船に戻った。明らかに出来なかったイカリに結ばれているブイを見詰めながら、我々は港へと帰って行った。夕方BCにて、明日以降の活動、イカリ及びその周辺の調査手順の打ち合せに熱が入る。そして、イカリの時代、あるいは存在背景を隊員一人一人、取り留めのない想像をして楽しんでいた。また、「その近辺にそれを裏付けるもの、あるいは、より興味深いものがあるのでは……」と一同希望を抱き、夢は広がっていった。



23日10時30分、出航。朝から雨。少し波がある。本日の予定は、イカリの計測、撮影及びスケッチである。11時17分潜降。計測、撮影を済ませ、スケッチをする為にイカリの周囲に方位を合わせて、ロープの設置を行う。スケッチは午後に行う事にし、上昇。

——午後の活動は風雨のため断念——

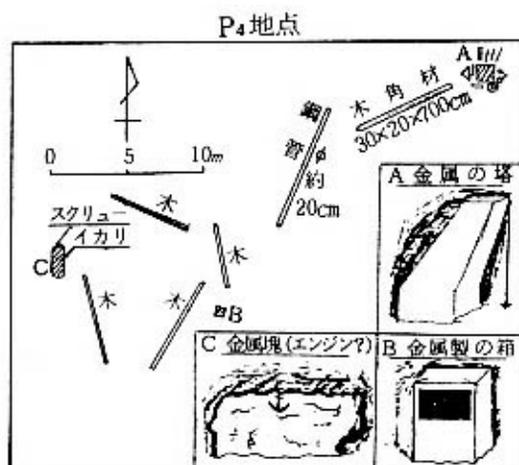
24日11時30分、出航。12時10分潜降。スケッチ及び周辺の探索。何も見当たらない。希望は裏切られる為にあるのだろうか。

ここで調査を打ち切り、現地を引き上げる。

3月の調査の結果、イカリについての資料として、位置・スケッチ等は残すことが出来たが、写真は露出不足で資料にならなかった。撮影機材のトラブルでストロボが使用できなかったからである。さらに「鑑」一般の知識を身に付けてゆく中でも、再調査の必要が生じる。

5月上旬、再調査を実施。イカリに関する調査結果を編集するに至る。また、イカリとその海底についての追求は、同海域全般の知識を深めていくものとなった。そして当時、それは友ヶ島南方に関する当初の見解（海底は保存される）をも崩し、探査活動の再開を否定したものとなった。

ところが、ちょうどその頃、加太の漁師の一人が次のような不思議な話を聞かせてくれた。「地ノ島の葦崎北方に、音響探知機に山のような影が映し出される所がある。また、そこでハギ漁の投げ網が幾度となく引っかかり、その網を上げると鉄錆が付着していた。」もちろん、そこに鋼製漁籠を沈めた記録もなく、さっそくこの情報をもとに、その「影」なる実体を探る計画を立てた。



1983年7月14日、P₄地点にて、構造物の残骸らしきもの確認。水深24m、底質は砂、視界は最悪である。——ライトを照らしても、1mより先は見えない不透明な暗黒の世界。元々口の利けない水中である、聞こえるのは自分の呼吸音、見えるのはライトの照らし出すわずかな空間だけである。来る季節を間違えた——とにかく、出来得る範囲で調査を始める。点存する三つの金属塊。散存する木片と鋼管。その一つ一つが静寂を守り、その存在が、より不気味な世界を演出していた。半ば手探りの調査が続く。そして、スクリー、バッテリー、ウインチと個々の特徴を掌むに従い、その構造物が沈船、恐らくそう古くない小型船舶であることが明らかになった。

——ここまでである。——これ以上の調査は、時節柄、海底の状況が許さなかった。しかも、この段階でその必要性も薄まり、当調査は打ち切ることになった。

我々の調査は、この紀淡海峡に、未だ知られざる古文化財の存在を否定したものではない。しかし、我々の興味をそそり、希望と期待をかき立てて来た当海域も、今や、広大な海の一部として映った。